

広報

かみす

Kamisu public relations

2025年

2/1

No.429

特集

刀剣研師

日本の文化を未来へつなぐ

神栖デイスカバリー

File
20

シュツシュツという研ぎ音がどんどん小さく、滑らかになっていく——。
神栖市在住で鹿島神宮の国宝も手掛けた刀剣の研師を紹介します。

Pick up

確定申告…………… P6～10
シーサイド道路ほか一時通行止め…………… P11
市営住宅入居者募集…………… P13



市メールマガジン
はコチラ



広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロード
し表紙にスマートフォンをかざし
てください。詳しくは16ページ



【COCOAR】





特集

刀剣研師

日本の文化を未来へつなぐ

かつて武士の魂だった日本刀は、今では日本文化を象徴する美術工芸品の一つとして大切にされています。実は、神栖とも深い関わりのある剣の伝承と、日本刀を守り次代へ伝える研師の世界をご紹介します。

日本に深く根ざした文化

相づちを打つ、助太刀^{すけだち}、切羽詰まる、太刀打ちできない、単刀直入、つばぜり合い、抜き打ち、身から出た錆……。これらの言葉には共通点があります。それは何だか分かりますか？ 答えは、どれも日本刀に由来する言葉。こうして挙げてみると、私たちが何気なく使っている言葉の中に、日本刀が文化としてしっかりと根差していることが実感できます。

一方で、実物の日本刀は、いつでも見たり触れたりできるような身近な存在ではありません。しかし、近年はアニメやゲームをきっかけに、たびたび刀剣ブームが起こり、若い

世代や女性、海外にも愛好家の輪が広がっています。

ところで、実は神栖市は刀剣と深い関わりがあるのをご存じですか？ 「古代の製鉄」鹿島神宮の国宝「日本刀を研ぐ研師」、この3つをつなぐ線をたどってみると、意外な関係が見えてきます。

神栖の砂鉄から作られた

刀は、鉄でできています。『常陸国風土記』には、古代の製鉄を語るときに必ず引用される有名な一節があり、「若松の浜の鉄を採りて、剣を造りき」と、若松の浜から採った砂鉄で剣を作ったことが記されています。また、「沙鉄は剣を造るに、

大だ利し」と、剣を作るといそうよく切れるという記述もあり、神栖の海岸はかなり良質の砂鉄が採れる浜だったことがうかがえます。

注目されるのは崇神天皇の時、その砂鉄で作った数々の武器や武具が鹿島神宮に奉納されたと記されている点です。奉納された年代が一致することから、国宝「節霊剣」が含まれているのではないかと推測されています。

節霊剣は『古事記』の中で、神武東征の際に悪疫を退散させ、平和をもたらす特別な神剣として描かれています。鹿島神宮が所蔵するのは全長2・7メートルを超える長大な直刀(反りのない真つ直ぐな刀剣)で、製作年代は約1300年前と推定され、我が国最古かつ最大の剣として昭和30年に国宝に指定されました。

平成11年に、この節霊剣を研いだのが神栖市の研師・細田邦信(雅号・光邦)さんです。今回は細田さんの細工場を訪問し、いろいろと話を聞きました。

後の人間国宝のもとで修業

まず、あまりよく知られていない研師の世界について、一から教えて

もらいました。

父親が刀剣愛好家で、早くから研師に関心を持っていたという細田さん。後に人間国宝となる永山光幹先生に19歳で弟子入りし、神奈川県平塚市の永山刀剣研磨研修所に住み込んで修業をしました。

「永山先生は非常に寛大なお人柄で、弟子はもちろん他の流派にも技術を惜しみなく公開される方でした。何より日本刀を



間近で見ると緊張感に包まれる



神栖の海岸で良質な砂鉄が採れた



鹿島神宮



日本刀の状態を確認する細田さん



①下地研ぎは目の粗い砥石に変えながら研いでいく ②8種類の砥石を使い分ける ③工程に合わせて砥石の形も変える ④使い込まれた研ぎの道具 ⑤仕上げ研ぎは繊細な作業が続く ⑥砥石を砕いた粒子で刃をこする

守るために、閉鎖的な秘伝・口伝の慣習を打破し、確かな技術を身につけた研師を育てたい、その一心で取り組んでおられました。そのため永山門下では修業期間が短縮され、私も入門から3、4年で1振りひとふりの刀を仕上げられるようになりました」

細田さんは日本刀の鑑定にも積極的に取り組み、各地で開かれる鑑定会の仕事も進んで引き受けたそうです。そうして頭角を現し、昭和54年から全国刀剣研磨コンクールで5年連続入賞。人間国宝・小野光敬こうけい先生の推薦で、26歳の時に史上最年少で刀剣研磨保存会への入会を果たしました。

昭和58年に故郷の神栖へ戻り、研師として独立。昭和60年にはつくば科学万博(国際科学技術博覧会)で大勢の観衆を前に研ぎの実演を披露したほか、テレビでも紹介されるなど、注目を集めました。こう聞くとまさ



研修所での修業時代

に順風満帆に思えますが、実情はそうでもなかったと細田さんは言います。

「自分から宣伝をするのが下手なので、口コミでポツポツと研ぎの依頼が入るくらい。研師という特殊な仕事で食べていくのは大変で、女房には苦労をかけました」

鹿島神宮の国宝を研ぐ

鹿島神宮の国宝「ふつのみたまのつるぎ 師霊剣」を手がけることになったのは、独立して16年目のことです。

「鹿島神宮から刀の調査を依頼されたのがきっかけです。宝物館は老朽化しており、杉の巨木に囲まれ、日陰で湿度が高く、刀の保存にはあまり適さない環境でした。ふつのみたまのつるぎ 師霊剣に錆が出ていたため研磨をすることになりましたが、国宝は持ち出すことができないため、鹿島神宮に研ぎ場を設けていただき、約1カ月間通いました。私は研師の修業をする前から鹿島神宮にお参りをしており、いつかは自らの手でその刀を研ぎたいという思いがありましたので、それが現実となり感無量でした。毎朝、神聖な気持ちで鹿島神宮へと向かったのを覚えています」

※1振りとは日本刀1本のこと



日本刀特有の刀文。白い波状の模様が美しい



刀剣の作者や作刀年などの「銘」が刻まれている



鍔などの刀装具も美しい

て製作した刀の良いところを引き出し、悪いところは抑えて、美的価値を高めるのが研師の役割です。まづ何より刀を見る目を養わなければ、正

宗が手掛けた刀なら正宗らしく、志津が手掛けた刀なら志津らしく研ぐことはできません。研ぎは、それぞれの刀との戦いのような気がします」と語る細田さん。そこに研師の真髓があるようです。

「日本刀は武士の魂であり、誇りであり、心のよりどころでありました。その刀に私も研師として49年間お世話になってきましたので、これからは刀に恩返しをしていく気持ちで、命が続く限り精進する所存です」

今回、細田さんはあらかじめ書き記したメモを見ながら一つひとつ丁寧に話してくれました。そのメモの最後は「妻 八重子の協力に感謝しつつ」という言葉で締めくくられていました。

日本刀には、時代を超えて多くの人の手によって今日まで守り伝えられてきた歴史があります。無限の美しさと力が秘められた日本刀を鑑賞しているうちに、自然と心が静まるのも魅力です。

刀をよみがえらせる熟練の技

話を聞いた後、細工場へ移動して研ぎの工程を見せてもらいました。ガ

このとき細田さんは、鹿島神宮所蔵の別の刀2振りも研磨しています。「1振りは水戸徳川初代藩主・徳川頼房公奉納の古備前景安です。平安末期から鎌倉初期にかけての刀で、激しい戦いのあとと思われる切り込み傷が3カ所あり、非常に驚きましたね。国指定文化財にしても差し支えないような名刀でした。もう1振りは、金庫に保管されていた江戸時代の刀「大和守安定」。錆びていましたが、展示できる名刀であることを鹿島神宮の方にお伝えして研がせていただきました」

ラス越しではなく間近に見る日本刀は迫力があり、一瞬で緊張感に包まれました。工程は大きく「下地研ぎ」と「仕上げ研ぎ」に分けられます。

下地研ぎは、目の粗い砥石から徐々に細かい砥石に変えながら、表面を研いでいく作業です。砥石は目の粗いものから順に、金剛砥、伊予砥、備水砥、改正名倉砥、中名倉砥、細名倉砥、内曇刃砥、内曇地砥の8種類。砥石の目が細かくなるにつれ、シュッシュツという研ぎ音がどんどん小さく滑らかに変化していくのが分かります。

仕上げ研ぎは、刃艶、地艶、拭い、刃取り、磨き、横手筋切り、ナルメと進んでいきます。親指の腹で刃をこする作業は、見ているだけで息が

刀に恩返しをする気持ちで

「いつの時代も、刀匠が魂を込めて製作した刀の良いところを引き出し、悪いところは抑えて、美的価値を高めるのが研師の役割です。まづ何より刀を見る目を養わなければ、正

宗が手掛けた刀なら正宗らしく、志津が手掛けた刀なら志津らしく研ぐことはできません。研ぎは、それぞれの刀との戦いのような気がします」と語る細田さん。そこに研師の真髓があるようです。

「日本刀は武士の魂であり、誇りであり、心のよりどころでありました。その刀に私も研師として49年間お世話になってきましたので、これからは刀に恩返しをしていく気持ちで、命が続く限り精進する所存です」



細田さん夫妻